

【題名】プリン売りの納税者

【氏名】立石 桃子

納税者になるということ。それはどういうことなのか。

この夏、久しぶりに静岡医療福祉センターを訪問した。そこは、幼いころ弟の脳症のリハビリに何度も付き添った場所である。ここではいろんな障がいを持つ人々が訓練をしたり、入院生活を送っている。彼らの多くは健常者と同じように働くことができない為、様々な税金の控除を受け、生活できるよう保障されている。弟が入院していた当時私はここで、あるプリン売りに出会った。電動車いすに乗り、自分で作ったプリンを売りにくる障がい者の方である。雨の日でもカッパを着て数百円のプリンを売りにくる姿は、子供心に痛々しく思ったことを記憶している。母は彼らを見つける度、いつもありったけのプリンを買った。「生かしてもらった社会に、少しでも貢献したい。」という彼らの言葉を聞き、感銘したのだと母は言う。税金という社会の手を差し伸べられて生きてきた彼らは、税金のありがたみを深く感じていたのだろう。彼らにとって、自分の手で稼ぎ税を納めることができたということは、自分は社会に参加したという自覚、社会の一員であるという大きな自信につながっていたのだと思う。そしてそれは、彼らが社会の扉をたたき、自立への確かな一歩となったに違いない。

私たちの納税に対する姿勢はどうであろうか。消費税が上がる話をきいて、「たくさん取られる」と思った自分が今は恥ずかしい。「取られる」という思いは、税金が社会でいかに使われ役立っているかを意識していないからだ。今回作文を書くにあたり、税金がどこでどのように使われているのかを調べた。自分のあまりの無知を情けなく思うと同時に、自分の身近な生活にこれほど多くの税金の恩恵を受けていることを知り、税金に対する見方が変わったように思う。国民全員に平等に、そして必要とされる場所や人に、有益に使われるのが税金。私たちはもっと、税金でこの社会をどのように変えていきたいか、自分の考えを持つべきだと思う。あのプリン売りの障がい者の方が、販売を終えて去る時、わずかに動く指でさす看板があった。「ノーマライゼーションの社会へ。」納税者としての自負がある彼らには、目指すべき社会の展望がしっかりあったのだろう。納税というのはお金を納めれば終わりではない。そこには、私たち一人一人が社会を支えて参加していくという自覚をもつこと、自分たちが生きていく社会は、自分たちで創造しなければならないという責任が、存在するのだと思う。

選挙権が十八歳に引き下げられ、成人年齢の引き下げも決まった。私たちが社会に参加する日は遠くない。私が納税者になった時、そのお金に希望をもって、納税することに誇りをもちたい。そして、この社会の未来を創造していきたい。